

道歌集 岩戸関

卷貳第

22
58

はしがき
中山氏禊教の趣
めんとてさきに
又その第二編を
る

旨をたやすく世人
岩戸開道歌集を出版
出版せんとて左の歌
を
 活悟
17
交
し
 36
内
今
 未
さ

世の人のとらひぐさこの思へごも

それを忘れてうたふ真ごゝろ

氏の真心は此の歌にあらはれたり氏の熱心
は此の言にて知られぬべし世の人此の真心

と熱心とを味はへて此の書を見なば卑しき
調べの中にも又得るところなきにあらざる
べし

明治三十六年十一月新嘗祭の日

龜陵道人

るす

(一)

國土のなりたつ元の親の身に。
子のやどりたる如くなるかな。

(二)

天の息地はこのからた神明は。
誠どころのひとつなりけり。

(三)

罪つみけがれ洗あらひさらひの。大おほばらひ。

わらふところが。七しち福ふくの神かみ。

(四)

神かみになる命いのちいたれも。もちながら。

凡ほん夫ぶのまままで死しぬるはかなふ。

(五)

うつし世よに。なたかき人ひとの多おほけれど。

死しして名な高たかき人ひとのすくなし。

(六)

ころくと人ひとの心こころが。まよふゆゑ。

息いきの教なしへの。あるところを知しれ。

(七)

出で入りの息の鹿島のかなめ石。

やまと心のすゑどころなり。

(八)

十人十いろに心かはれども。

かはらぬものゝ息の妙用。

(九)

心あらが。ところえて見よ真心の。

ところは神の心なりけり。

(十)

言葉にも繪にもかかれぬ真心を。

皆人ごとにうけてたのしめ。

(一十)

はらはねが。思ひの雲の。おとなりて。

月日の恵み。さらさら知られじ。

(二十)

すさの男の尊でさへも。はらひして。

世に功績ある神となりけり。

(三十)

古への人の行くすゑ。見てさどれ。

いかなる人の末。いかにと。

(四十)

草も木も。又山川も。國國も。

ぎみ。兩神のかたみなりけり。

(五十)

誰たれも着きる。まももの元もとを。たづぬれが。

忌部いんべの神かみの。めぐみなりけり。

(六十)

温泉をんせんも醫者いしゃの薬くすりも。みな元もとの。

出雲いづもの神かみの。めぐみなりけり。

(七十)

有あり難がたや。心こころのうちに火ひを點つけて。

見みれが。見みるほど涙なみだこぼるる。

(八十)

日ひの本もとの。人ひとの燈臺とうだいも。とくらし。

心こころのうちに。日ひをうつさねが。

(九十)

まかぬ種たねはえる事ことなし。眞心まごころの。

種たねまきをして。つくれひとぐ。

(十二)

豊年ほうねんも。まきんも人ひとの心こころから。

知しらずくくに。種たねをまくなり。

(一十二)

精神せいしんを。やまぢぎるとい。知しりながら。

なほもすどすい。酒さけのみのかせ。

(二十二)

ぬとほけて。とまどひをして。つまづまで。

十方じふほうにくれて。ほしやともし火ひ。

(三十二)

ゆめならが誰たれも知るべき。わけはなし。

よくく見みれが親おやのふところ。

(四十二)

大たいほうを。はなせが誰たれも。おどろいて。

おのが心こころの。ねとほげを知る。

(五十二)

大たいほうを。はなす人の。ちからにて。

あたるの神かみの。ちからなりけり。

(六十二)

とほかみと。なりとどろかす雷かみなりの。

聲こゑもろとも。はるるむら雲くも。

(七十二)

たたかひに。勝つもまけるも。神はかり。

まこととの道。まげる事なし。

(八十二)

身をさめ家をととのへ。子を育て。

朝廷のためにつくせ世の人。

(九十二)

世の中に誠の人。さらになし。

あれが不思議の人と言ふらん。

(十三)

君のため。國のためとい。口に言へど。

とかく我が身のため引かるる。

(一十三)

我^わが^がお^おろ^ろか^か。次^し第^{だい}く^くに^に。わ^わか^かる^るな^なり^り。

思^{おも}ひ^ひの^の雲^{くも}を^を。は^はら^らひ^ひま^まよ^よめ^めて^て。

(二十三)

我^わが^がれ^れろ^ろか^か。わ^わか^かれ^れば^ばわ^わか^かる^る神^{かみ}の^の道^{みち}。

か^かし^しこ^こま^ま人^{ひと}の^の。と^とに^にも^も角^{かく}に^にも^も。

(三十三)

く^くよ^よく^くと^と。思^{おも}ふ^ふ心^{こころ}の^の。し^しが^がら^らみ^みを^を。

な^なが^がす^すみ^みそ^そぎ^ぎの^の川^{かは}の^の大^{おほ}み^みづ^づ。

(四十三)

な^なま^ま息^{いき}と^と神^{かみ}の^の御^み息^{いき}の^の入^いれ^れか^かへ^へに^に。

吹^ふき^き出^だす^す息^{いき}の^のい^いせ^せの^の神^{かみ}風^{かぜ}。

(五十三)

はらはねが誠まことの事ことも。うそになる。

うそいなほさら。わざはひの種たね。

(六十三)

はらはねば。心こころの鬼おにが身みをせめる。

はらひすませが鬼おにもよろこぶ。

(七十三)

ねがはくが。奈良ならの春日かすがの山やまあらし。

むねの雲霧くもきりはらひたまへや。

(八十三)

くさりたる人ひとの心こころの入れ替かへい。

阿波岐あはぎのはらのみそぎなりけり。

みそぎせぬ。人の兒どもの心かな。

見る物ごととに。とかくほしがる。

猫の子を取られてくやむ。人もあり。

親の死にめをまつがまもあり。

いたづら子。かたなむたすの親ころし。

親ハ子ゆゑに。なやみくるしむ。

子の親に又孫ハ子に親不孝。

やれたそろしや。罪のとも引き。

(三十四)

おそろしや。にんしん中のあやかりが。

子の性質になると思へが。

(四十四)

孝行の親がとせるか。子がするか。

すべて和合の道の御ちから。

(五十四)

道みちの道を知らねが。迷ふなり。

先大道の御ちからを知れ。

(六十四)

一度は。さかんなりと。おどろへん。

誠の道をもまなび知らずが。

(七十四)

淺あさましや。ぐちとんよくの願ねがひ事こと。

わいろ納なめて神かみをたばかり。

(八十四)

耳みみも目めも口くちも手て足あしの働はたらきも。

いでいる息いきの神かみのいさをし。

(九十四)

六ろく代だいの君きみにつかへし。武たけの内うち。

これ大臣だいじんのかがみなるべし。

(十五)

日ひの神かみのつたへをうけて世よの中なかの。

ひとの心こころは。四し海かい兄けい弟てい。

(一十五)

誠まことゆるゑ思おもひがけなき幸福きふくの。

あるハ神しん變へんふしぎなりけり。

(二十五)

神しん德とくの廣くわう大たいなるもわきまへぬ。

せまき心こころぞくるしかりける。

(三十五)

さいなんも皆みな幸福きふくにかはるなり。

和わ合がうの道みちハさてもたふとや。

(四十五)

御みはらひのその神しん德とくハ親おやが子こを。

めぐみそたつる如ごとくなりけり。

(五十五)

子^こ寶^{たから}を親^{おや}の手遊^{おもちゃ}に育^{そだ}てなげ。

親^{おや}の家^{いへ}とくひ子^この手遊^{おもちゃ}なり。

(六十五)

我^わが心^{こころ}人の心^{こころ}にうつりなげ。

ひとの心^{こころ}は鏡^{かがみ}なるらん。

(七十五)

天^{あま}照^{てら}す神^{かみ}の御息^{みいき}のわけみたま。

皆^{みな}人^{ひと}ごとにゆきかよふなり。

(八十五)

國^{くに}に君^{きみ}家^{いへ}にひあるじ人^{ひと}に息^{いき}。

なくて叶^{かな}はぬ世^よの中^{なか}と知^しれ。

(九十五)

そんするも。又得するも。よろこぶも。

なくも悔むも。迷ひなりけり。

(十六)

我が物と思ふこの身に。いたるまで。

天地の神の物にぞ有りける。

(一十六)

天地の神のちかひに産れたる。

人は此の世にねんま奉公。

(二十六)

錢金のよくにはなれて働らかば。

天下泰平國家安穩。

(三十六)

なくくも。うれひかなしむ。事こといなし。

産うまれた時ときのはたかおもへば。

(四十六)

すき腹はらは何なにをたべるも。味あじのよさ。

食しよくのうまさい。働はたらきにあり。

(五十六)

我わが身みより。つらまかなしき。人ひとを見みて。

思おもひまはせが。くちも言いはれず。

(六十六)

親おやとなり。子ことなり。夫ふう婦ふ主しゅ従じゆと。

なるもむすびの神かみはかりかな。

(七十六)

よき事のむすびのえんに預りて。

ここに立斬るあしまいんねん。

(八十六)

うへもなき神の誓ひに預りて。

先祖にの孝子孫にの慈悲。

(九十六)

神拜と神樂の道をつとむれが。

家内安全子孫長久。

(十七)

道すがら袖ふりあふるえんなれが。

いもせのえんにふかまいんねん。

(一十七)

家國いへくにを。おこす喧嘩けんわの。よけれども。

倒たふすけんくわの。見みても見みにくし。

(二十七)

安國やすくにの神かみのつたへの近道ちかみちを。

知しらねば迷まよふ。知しれが迷まよはず。

(三十七)

道みちの。一いつ教かへのまこと。ままぐに。

まよふ心こころを。はらふ御教みかへ。

(四十七)

枉事まがことの罪つみもけがれも。はらへとて。

神かみのつたへし。みそぎなりけり。

(五十七)

たちばなの。小戸のみそぎを。初めにて。

千々の教も。あらはれにけり。

(六十七)

人形を。あやつる人の。ちからより。

人をあやつる。息ぞたふとき。

(七十七)

耳も目も。息の手代と。わかりなげ。

文字の言葉の。めしつかひなり。

(八十七)

高ぶるな。水ひくみに。流れ來て。

萬の物を。めぐむと思へが。

(九十七)

金持も貧乏人ももの知りも。

馬鹿も世界の道具なりけり。

(十八)

我れよかれ。人あしかれと思ふかな。

和合の道をまなび知らずが。

(一十八)

あらはれた罪に法律のあるごとく。

かくれし罪を神にゆるさず。

(二十八)

少食と粗食粗服は身の薬。

れとり高ぶる事ハ身の毒。

(三十八)

はづかしや。我が行ひの。よしあしを。

息の主じい。常に見とほし。

(四十八)

かやの外浮世なりせば。かやの内い。

ゆたかなりける。神代なりけり。

(五十八)

唯一ツ。日止つの道を。まもりなげ。

萬の事に。かよふまところ。

(六十八)

唯一ツ。ひとつの道も。わきま入ず。

うそ八百に。迷ふかなし。

(七十八)

善ぜん惡あくの。むくいひ直すくに。神かみ々がみの。

咎とがめも有あれが。御み惠めぐみも有あり。

(八十八)

大たい切せつの。息いきの。教かへを。わきまへず。

皆みな小せう説せつに。迷まよふ。かなし。

(九十八)

藥くすりにて。なほり兼かねたる。病やまひこそ。

皆みな息いき神かみの。たたりと。知しれ。

(十九)

有あり難がたや。浮うき世よの中なかに。くらすとも。

神かみの。教かへを。まもる身みなれが。

(一十九)

家毎いへごとに。鎮しづまり居ゐます。祖み先おや神がみ。

まつる主あるじい。家いへの神かみ主ぬし。

(二十九)

もろくの花はなにさまたつ梅うめの花はな。

やまと心こころをふりおこせとや。

(三十九)

身みの病やまひ心こころの病やまひ。なくなれが。

くらう心しん配ばい世よの中なかになし。

(四十九)

福ふくの神かみ表おもてにはりて。かざるとも。

貧びん乏ぼふ神かみハ。裏うらよりぞ入いる。

(五十九)

山道も上りつめれば下るなり。

うきよの人が行きつもとどりつ。

(六十九)

七ころび入おきの後に目がさめて。

見るもうれしや明ぼのの空。

(七十九)

君の恩なてもさめてもわすられず。

息の出入のあらん限り。

(八十九)

三保の崎に鯛をあやつるつり糸の。

いまの事代主の神かな。

はらはねが貧乏神の。つきまるとふ。

はらふ門にハ福きたるなり。

四海なみ。しづかなるらん。日本の。

神の教に。はらひ清めて。

明治三十六年十二月四日印刷
明治三十七年一月一日發行

定價金拾錢

著者兼發行者 東京府平民 中山瀧太

東京市淺草區馬道町 壹丁目三號七番地

印刷者 東京府平民 中山清助

東京市淺草區馬道町 壹丁目三號七番地

印刷所 東京並木活版所

東京市淺草區黑舟町 二十八番地





